

さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体を感じた。イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。そこで、弟子たちは言った。「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい。」

-マルコ5章-

## 神とつながる信仰

信仰者にとって「生きる」とは神とつながっていること。死」とは神から離れていること。と捉えます。本来、無であったものが「恵み」を与えられて存在している現実を「当たり前」のこととして生きている人は、神を必要としなかった無知と尊大さが、実は神から離れた状態（死）であったことをいつか思い知る時が来るでしょう。旧約聖書の創世記成立の背景には、イスラエルの民のそのような苦悩に満ちた営みが見受けられます。

かつて恩恵の中にあつた者が、安住、繁栄とともに、ちょうど母親がすべてだった幼児が、少し力がついてくると一人で大きくなったような顔して母親を顧みなくなるように、神を必要としなくなって、悪の道でついに国を滅ぼし、希望のない絶望の淵に置かれてバビロン捕囚時代を体験した時です。それは、今までの生き方を根本的にひっくり返されたような出来事で、彼らには、神を信じていた筈のユダヤ人が国を亡ぼされたのは、神に見捨てられたことではないか、今までの信仰がインチキだったということではないかと疑わせ、悪に対する疑問、悪と悪から出るあらゆる苦しみ、抑圧、非人間的な生活そして「死」それらはなぜ受けなければならなかったのかと向き合わせられた体験でした。苦渋の中から、選民が経験した歴史的な悪の原因、その基本的理解が、創世記11章（バベルの塔）までの神話物語を通して、すべて人間の利己主義と不正から出たことであり、それは、人間が被造物であることに由来すると理解したときの、神に立ち帰ることで再び生きる希望を見出したユダヤ人たちの精神性がその背景となっているのです。

捕囚から民を帰還させた神が、再健国を目指す民に、メシア登場まで500年間の沈黙をおいたのは、向こう岸へ渡るために嵐の中を漕ぎあえいでいる弟子たちに、艫の方で彼らの信仰を見つめておられた、来るべき新約のイエスの前表でした。

私たちが神を裏切っても、決してその私たちを見捨てない神は、わたしたちの信仰には直接つながる神なのです。“あなたの信仰があなたを救った”と。

